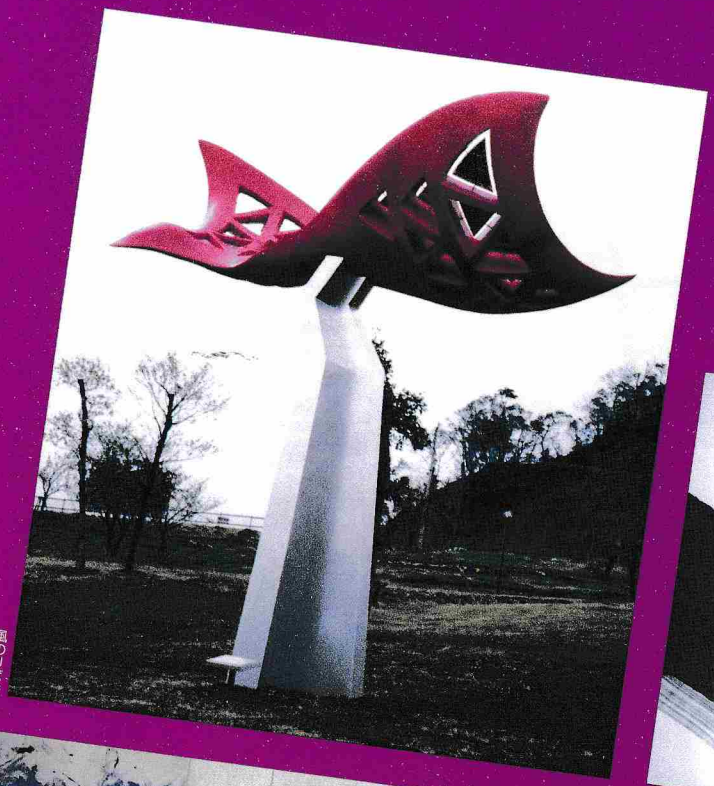
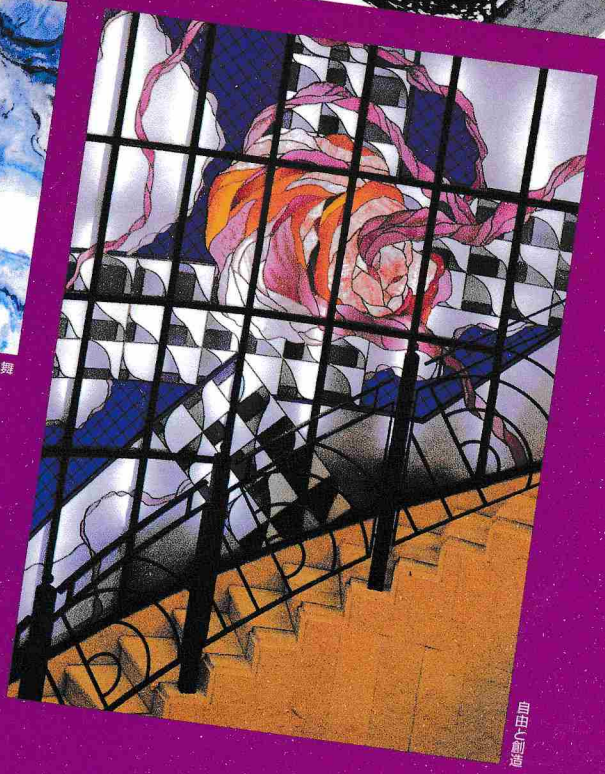
NO.26 1998.8


風のリボン

未知

水の舞


自由と創造

aaca

社団法人日本建築美術工芸協会

彫刻家
TETSUSHI NAGASAKI
長崎　哲士
東京都大田区田園調布本町34-7
TEL03-3722-8391

「風のリボン」
Ribbon of the Breeze
設置場所：鹿児島市犬追町825
6000㎜H×5000㎜W×2300㎜D

大きく優美に大空を舞うこのリボンは緩やかに動き、あたかもリボン自身「生きづいて」いるかの如く永遠に呼吸し続けます。
つまり、この公園を訪れる人たちの幸福と健康を祈りつつ……

墨・作家
SHOZAN MORII
森井　象山
岐阜市八代3-26-2
TEL058-232-7197

「未知」
設置場所：
1800㎜×1200㎜

和と洋を問わない、墨アートを建築空間に求め続けている。墨を生かす素材は紙、布、木、コンクリートの中に墨を流し込む迄実に多様である。壁画から、内装インテリア迄オリジナルな墨の持つ幽玄なる墨美の世界を建築に生かした。

造形作家
KYOKO IBE
伊部　京子
京都府向日市寺戸町東ノ段9-9
TEL075-933-8926

「水の舞」
設置場所：向日市民プール
4800㎜×2600㎜

和紙の原料である楮の繊維に色泥を混ぜて、クレーンで吊り上げたセラミック板の上に流し紙漉のようにゆすって動かしイメージを定着させました。焼成し繊維が焼失した後には水の痕跡が鮮やかに浮かび上がりました。

ステンドグラス作家
ATSUKO YASUKOCHI
安河内　敦子
東京都目黒区中目黒5-24-27
TEL03-3793-8052

「自由と創造」
設置場所：東京・新宿
東京モード学園
4500㎜H×4000㎜W

エントランスホールに足を踏み入れると、見上げる様な吹抜空間いっぱいに銅赤・金赤・ゴールドピンクなどの鮮やかな色彩が目に飛び込んでくる。過去から未来へ連なる大宇宙から溢れ出す創造へのエネルギーを表現した。

CONTENTS

文化・芸術と都市空間……1
aaca見学会……4
aacaトーク
　野口　晴朗……8
　橋本　堅太郎……9

■表紙デザイン
　高部　多恵子

表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合せ下さい。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行いますのでご了承下さい。

都市と野生動物

都市内の野生動物と言われて思い起こすのはネズミやゴキブリなどの害獣や害虫、スズメ、カラス、ドバトなど等でしょう。

しかし実際には都市内に様々な野生動物が生息しています。しかも、どうやら最近ではその種類や数も増えていると言われています。

こんにち日本人の大半が人口集中地区に居住していますが、つい30年程前までは多くの人達は農村地域に居住しており、文化的にも自然や野生生物との多くの関わりをもっていました。その為、野生動物との関わりについては何処までが都市の固有のものであるかは判然としませんが、都市生活の中で野生動物との関係は思っているより深いものがあると考えられます。

そこで自然とは縁遠い環境と一般的に思われている東京の都心や、古くから都市生活を営んでいる京都などの様子から、人工的環境と自然環境との接点、そして人との関わりが街づくりのなかでどのように生かされているかを見つけてみたいと思います。

都市の風物となっている動物

日常的にあまり気付かずに居ながら、既に都市の風物になっているものに鳥類があります。集団で飛来する姿や鳴き声は町並み景観の重要な要素となっています。

- 初夏に子育てをするツバメ。
- 都鳥として歌にも詠まれているユリカモメ。
- ビジネス街のなかのカルガモ。
- 群をなしてビルの隙間や街路樹に野営するセキレイ。
- 秋の日暮れどき街路樹や電線をねぐらとして集まるムクドリの大群。
- 町中の川や池などの水面に飛来するカモ類。
- 街路樹や公園の木立に穴を開けるコゲラ。

市街地の中で最も古くから風物詩として取りあげられているものにツバメがあります。かっては春になると商店街の狭い道の間を飛び回る姿が多く見られていました。

最近では少し見かける事が少なくなっていますが、驚く様な場所で見かけることが出来ます。池袋の西口、地下駐車場へ入る階段の上の看板に営巣していることが確認されています。ツバメは人の見られる場所で営巣と子育てをします。近年の研究では人に近い場所を他の鳥類がさける為、逆に他の鳥のテリトリーと競合しないで営巣ができる智恵だとの事です。古くからツバメが親しまれ、益鳥とされてきた事もツバメの繁殖の為の戦略かもしれません。

最近ではあまり新聞で取り上げられなくなっていますが、大手町の三井物産の人工池にカルガモの親子が15年程前から登場しています。またこの池の近くで車が毎日数万台通る様な場所の小さな池である「あさひ・マルハビル」に最近カルガモが繁殖しているようです。その可愛らしい雛の姿はまさに都会のオアシスとも言うべき光景です。

毎年10羽程度の雛が生まれ、かなりの高率で無事巣立っているようです。専用の警備員が付く等の保護策も取られている事もあるのでしょうが、野生のカルガモの巣立ち率と比較するとかなりの高率と思われるため、市街地で繁殖出来るアヒル類との混血が進んでいるのではないかとの見方も有るようです。

都市の緑の効用

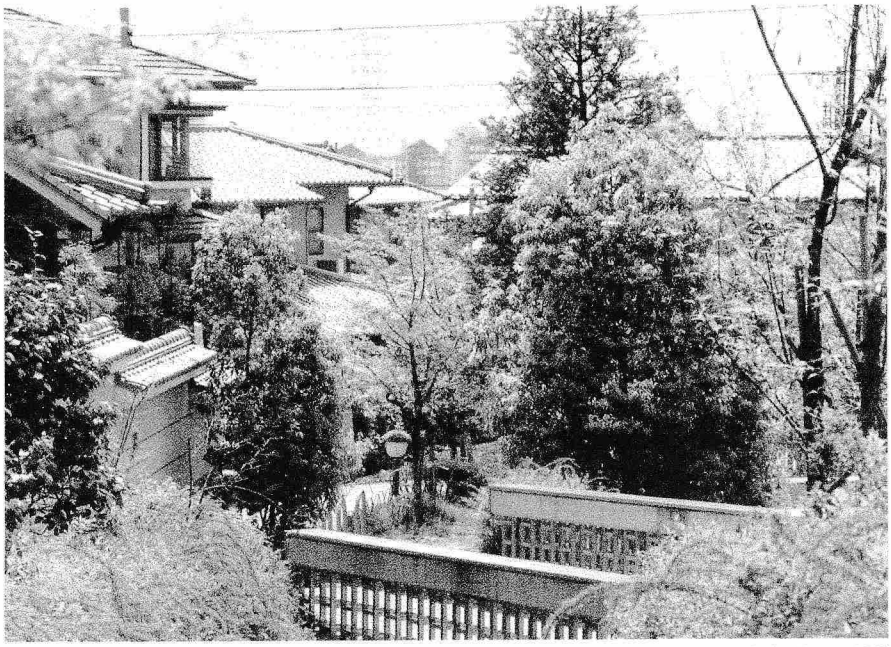
都心のまとまった緑の公園・緑地である皇居や新宿御苑、小石川植物園、日比谷公園などに加え、社寺林、建物回りの庭園・植栽、街路樹など、緑の環境は動物達にとって必須環境です。

都市の環境が変わり始めた象徴として、カワセミの復活が見られます。東京オリンピックの頃までに都心の公園や水辺から姿を消したカワセミが1970年代から再び姿を見せ始め、最近ではJR山手線の内側の区の公園の水辺や池、お堀で見られるようになっています。川の水質が改善され餌となる小魚が復活した事や、樹木が大きくなり、生息環境が大きく改善された事が主な要因と思われますが、カワセミ自体にも人との共存―人に見られている安心感―が出来始めたのかも知れません。

林の中が専売と考えられていたキツツキ（コゲラ）も都心で繁殖を始め、日比谷公園などでも目撃されています。コゲラが枯れ木に巣を造る為、放置された自然の森林が増えてきているとも言えます。

このように山林の中で生息する鳥類と思われているものが都心でも見られるものの一つにオオタカがあります。都心に数多く生息するドバトを襲うオオタカが都心部で確認されたり、京都の中心部にある御所にオオタカが見られ、迎賓館の建設にも配慮が必要になるなど、野生動物にとって都市の食餌環境の良さも含め、新しい生存環境が出現しているとも言えます。

この都心の緑の中で蝶類が多く見られます。幼虫の食樹であるサンショウやカ



自然の環境を重視した緑道

ラタチ、クスノキ等が庭に植えられているとクロアゲハ、カラスアゲハ、アオスジアゲハ、ミナミアゲハなどが飛来し、その内に大きな緑の芋虫によって葉が丸坊主にされたりしますが再び優雅に飛び舞うアゲハを見る事が出来ます。時々街角のそのような木々に芋虫をみかけます。

お堀などの開けた草原で見かけるモンシロチョウが減り、森の日陰を好むスジグロチョウが増えてきた事も、ビルの日陰が増えた事や大きな樹木が育ってきたことと無関係では無いかも知れません。

美しい姿で都市の演出をする蝶に対し、音で街に存在を見せるのが蝉です。7月頃からニイニイゼミが鳴き始め、9月から10月頃のツクツクホウシまで公園や街路樹で鳴き続けます。

町中の緑は僅かであっても生物にとっては貴重です。緑を増やす効果が現れたのでしょう。

都心に戻ってきたタヌキやキツネ

ほ乳類も都市に生き続けています。アブラコウモリ、アズマモグラ、ドブネズミ、クマネズミ、ホンドタヌキなどが良く知られています。

都心にタヌキが住んでいるのは奇異に感じるかも知れませんが、古くから人里に棲んできた動物で、市街化の進む中で街なかに適応して来たのでしょう。都内の23区での目撃例も増えているようです。

タヌキといえばキツネです。イギリスではブリストルの街なかで日常的にキツネが見られることがBBC放送で有名になりましたが、ロンドンをはじめ、ドイツのエッセンやコペンハーゲン、パリなどでも見られるそうです。北米の都市ではアライグマが街なかに生息しています。欧米の公園ではりすの姿を見かけるのもふつうです。

町中に見られる動物の彫像

永い動物との関わりの中で、動物は文化的対象ともなっています。

ヨーロッパと異なり都市が現代まで発達しなかった日本では、田園地域の動物との関わりが中心になっているようです。

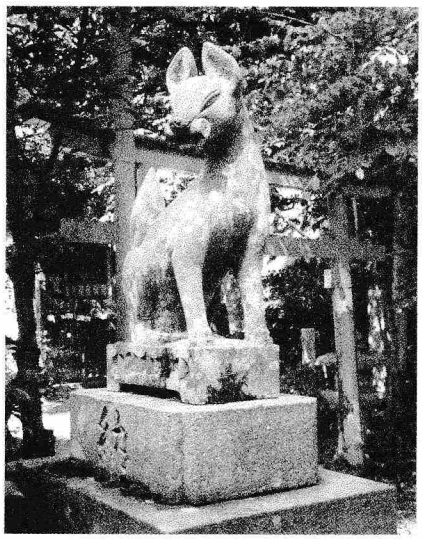
街角の彫像でよく目にするのは狛犬やお稲荷さんの狐ですが、京都の街ではネズミ、サル、トビなどの狛<ネズミ>、タヌキやカエルの焼き物などを見かけます。

ヨーロッパの街なかの彫像では都市の施政者や記念碑が中心ですが、時々動物をモチーフにしたものもあります。日本と異なり馬の群れ、豚の行列など身近な家畜や童話を題材にしたものなどで、ブレーメンの動物達など街と動物の題材が取りあげられています。

京都では古くからの都市生活のなかで商業者（町衆）による祭りも盛んであり、中国の故事から採った題材や、謂われによる町名があります。祇園祭の中心地である鉾街には百足屋町、蟷螂山町などの町名があり、蟷螂山ではカマキリの彫像がからくり仕掛けで動く等の趣向がおこなわれています。　（道家駿太郎）

■参考資料

大都会を生きる野鳥達　川内博著　地人書館／**庭にきた虫**　佐藤信治著（社）農山漁村文化協会／**街なか生きもの探検ガイド**　佐々木洋ほか著　NTT出版／**イギリスの都会のキツネ**　スティーヴン・ハリス　斉藤慎一郎訳　晶文社



お稲荷さんのキツネ

ブレーメン街角のブタの彫像

ムカデを町名とした京都の町

百足屋町由来　黒竹節人氏談

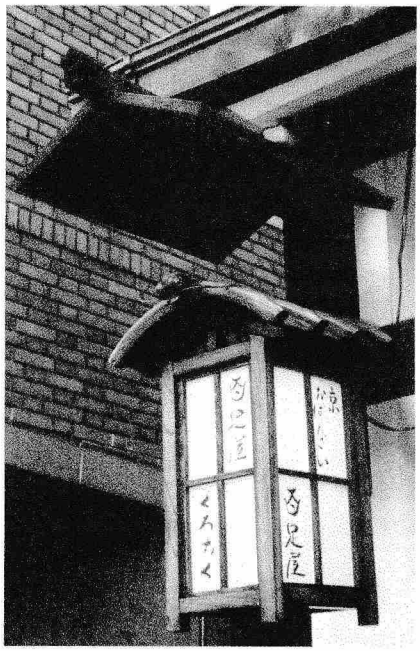
一般的に言えばムカデはかなりの嫌われ者ですが、京都の町の中にはこのムカデを町名にしている所があります。害虫と言われるものまでシンボルにしてしまう町の文化的懐の深さを感じます。そこで近年この百足屋町にお店と事務所を構え、お店の名前にも「百足屋」と名付けておられる黒竹節人氏に町名の由来や町の様子を伺いました。

百足屋町の名前はかなり古くからのものです。応仁の乱以降戦国時代には此のあたり四条界隈が京都の経済の中心であり、町衆の力が強力になっていました。特に百足屋町のある新町通りは後に、今でも残っている松坂屋を始めとして三井家や茶屋四郎次郎、林羅山などが住んでいたように、大店が集まっていた所です。

中世の産業に詳しい故吉田光邦先生のお話に依れば、当時色々な物を扱う商売人のことを「百足商」と呼んだそうです。百足は昆虫の中では生命力が極めて強いとされ、虫の王様として評価されていた事や、百足の足がお金（おあし）に通ずるなどの事もあり、当時総合商社的大店が軒を連ねていた事からつけられたと思われます。

此の町名は他に御所の近くにもあり、洛中洛外図の祇園祭巡行の図の中に百足のノレンのしもた屋が出てきます。歌舞伎にも百足屋の屋号が出るなど比較的親しまれている名前です。

百足と言えば南北朝の頃鉱山の発掘に



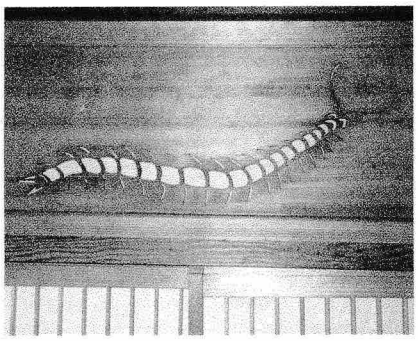
百足を形どった看板

当たる者を百足衆と呼んでいたり、伝令の旗には百足の図が描かれていました。「死して倒れず」と言った意味でしょう。

此の町内は南観音山ですが、町会所の欄間には百足の図が彫り込んでありますし、「百足虫死而不倒」の額が掛かっています。

古い町家を活用した料理のお店を出した時に町名にインパクトを感じ、「百足屋」とし、看板も百足をモチーフとしたものにしています。

百足屋の向かいに百千足館（ももちたるかん）を造った時に彫刻家の薮内氏に百足の彫刻を制作して貰い、シンボルとして飾っています。女性の方には怖がられるようですが。　（文責道家）



百足の欄間

百足の彫刻

動物と共存する街づくりの試み

京都桂坂の自然環境造り

京都市の西、洛西に約170haの宅地開発が進められています。この開発では当初から自然との共生がテーマとされました。

北側は苔寺として名高い西芳寺に連なる山地、南側は竹やぶが残りその南にニュータウンが広がる立地です。

街の中央部に古墳の群集があり、古墳公園として約3ha程が自然のまま残されました。

開発地は東西に細長く、中央部にT型に足がでた茸状の形です。

計画にあたり、まず北側に山地から中央の古墳、南側の竹薮の緑地にかけて広い緑の帯を設定し、「鳥の道」と名付けました。鳥が北の山地から緑の環境を伝い、ニュータウンの公園や川辺へ行き来できるようにとの配慮からです。

鳥の道の始まる山際には谷を埋めた為、斜面に囲まれた平地が出来ることになりました。この平地に人工的に池を造り周囲の山地を含めて野鳥の聖域（バードサンクチャリー）とし、また古墳公園に隣接して近隣公園を配置しています。

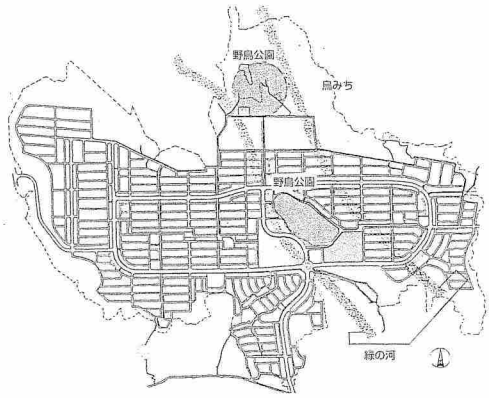
南北の大きな緑の帯に対し、東西に幹線の緑道を設け、この緑道を背骨として8m程の補助緑道のネットワークを形成しています。この補助緑道は虫や鳥の餌となる実のなる木など豊かな植生の「ヘッジロー」を形成しています。

美しいチョウの前身は芋虫であり、また鳥の主食は虫である事を考えると、街なかの生物は人間の好き嫌いで一部だけが生息出来る環境とする事は矛盾があります。

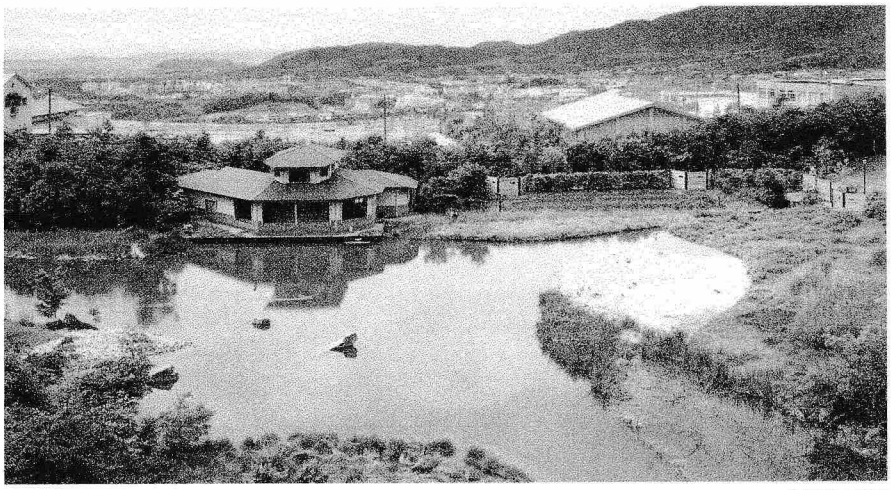
この街づくりでは丸ごと生存出来る環境を目指して計画しています。

しかし現実には生物の循環は生易しいものではありません。バードサンクチャリーでは人が近付けない工夫をしたにも関わらず野良猫や野良犬が入り込み、折角繁殖したカモの子供が全滅するなどの事もあります。この時は猫を捕獲し、車でひと山越えた遠くまでお引き取り願っています。

最近では街全体に緑も増え、池にはカワセミも飛来するなどの環境が出来上がりました。（道家駿太郎）



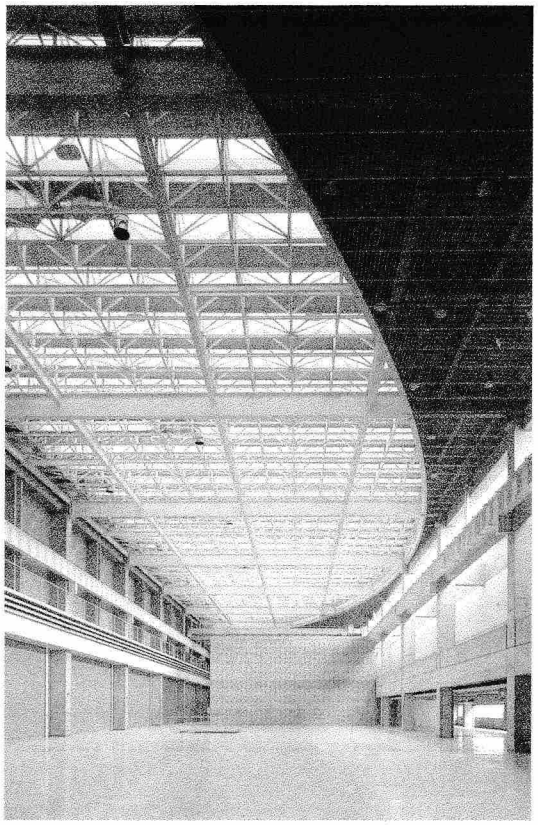
桂坂マスタープラン



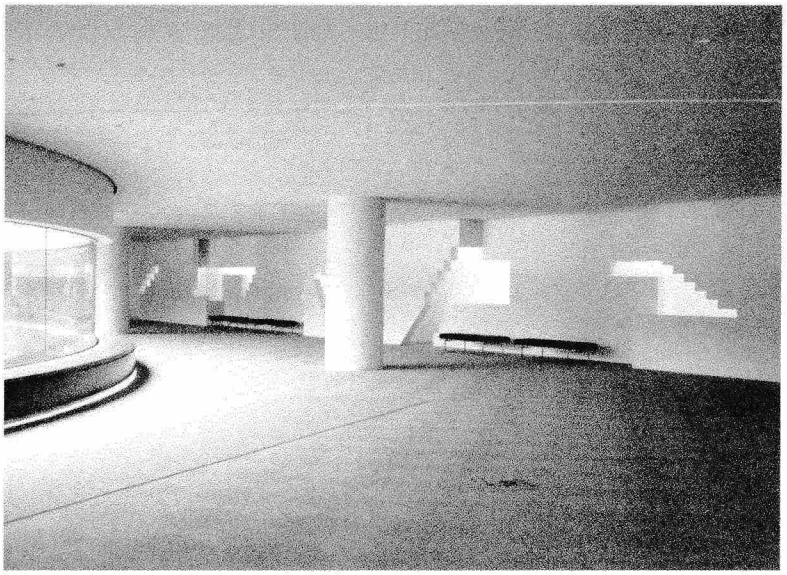
桂坂野鳥公園

aaca見学会

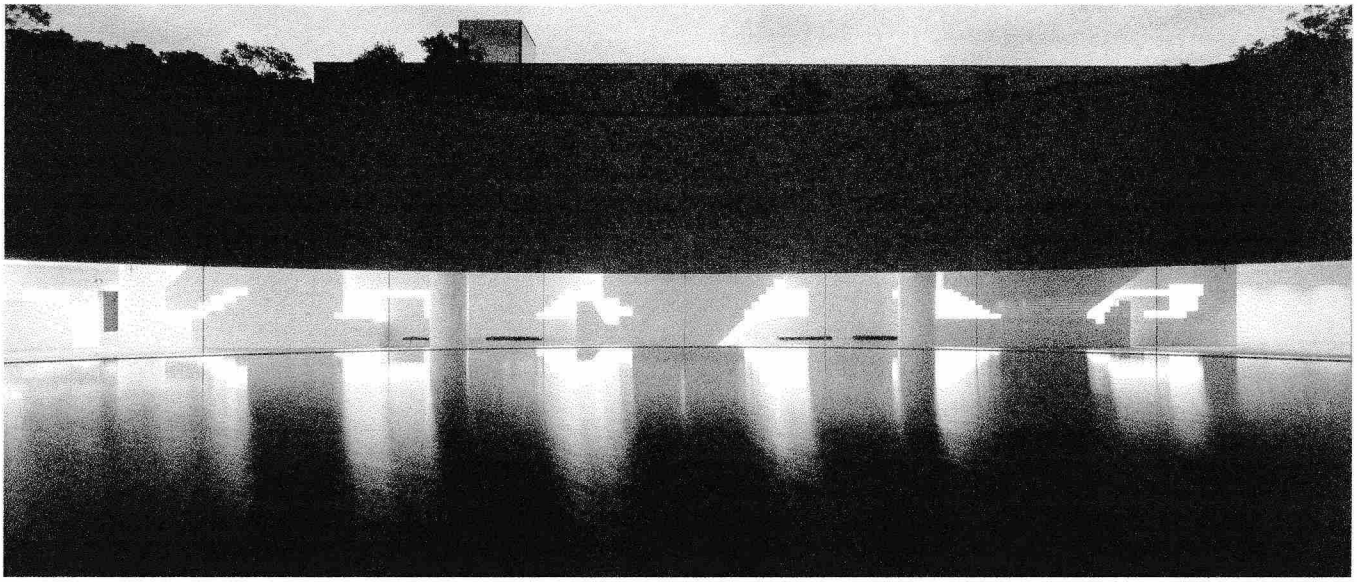
日時：平成10年4月14日(火)
　　午後1時30分～4時
場所：三井海上千葉ニュータウン本社ビル
　　(午後1時30分～2時30分)
　　千葉ニュータウン　竹中研究所
　　(午後3時～4時)
所在：千葉県印西市大塚



竹中技術研究所 大型構造実験室



三井海上本社ビル　1F回廊



二重壁としての造形　1994年／三井海上千葉ニュータウン　本社ビル

aaca会員
フォンス有限会社
CHIHAYA NAKAGAWA
中川　千早
東京都世田谷区粕谷3-24-23
TEL03-3307-7392

大雨の予報を気にしながら千葉ニュータウン中央口駅へ向い、着くと案の定風雨かひどく、役立たずになった傘を片手に、庭先から親しい人を訪ねるような趣で三井海上千葉ニュータウン本社ビル玄関ホールに入った。目の前に大きな水盆（池）が日本画を見るように広がった。

石原直次氏の案内でaacaの皆様と館内を廻った。受け付け脇の真紅のアートワークが全体のモノトーンの環境の中で生き生きとし、片山利弘氏の二重壁を使ったレリーフが清楚で心を打った。屋外の水盆を取り囲むこの環境アートを建物の曲線にそって歩くとどこに居ても水と、レリーフの間を抜ける想像上の風がデュエットを奏でている中に自分が居る体験に浸った。食堂の壁面全体を落ち着いて柔らかい色彩の面で構成した粟辻博氏のアートワークは、親しく交際していただいた氏の優しい姿と重なり、胸が熱くなった。開放された面から望む風景とクレーのような抽象構成が一体化して美的体験に包まれた。アートワークが建築家やインテリアデザイナーなど他の創造者のワークと切り離されて自立するのではなく、それらと共同し空間のボリュームや動線による時間の計画や光や音を配慮しあいながら、相互に影響し、使う人に全体を引き継がれていた。

その後、竹中技研の設計を担当された赤坂喜顕氏の案内で見学し、わたしは二度目にかかわらず意欲的な建築的実験の数々の説明を興味深く学んだ。

建築から離れて事後にギャラリーが納入し、ただ鑑賞されるものと考えられていたアートワーク観を払拭して、わたしはタペストリーを建築環境の一部として訴え続け、美術館に展示されるアートのおおかたの側からは近代的作家主体が確立されていないと非難されながら25年余り歩んできてしまった。ここで見学したアートの総合性の高さを知り、パブリックアートは地位を築いたのだと隔世の感を深めた。これからも、ここで仕事された先達に学び、建築の中で始まる使い手の新しい生活を支えて行く美的環境造りに、意欲あふれる人達との出会いを夢見て取り組んで行きたいと、心地よい疲れと共に希望を持って帰途についた。

aaca会員
PLANNING STAGE
TAKAKO FUJIWARA
藤原　貴子
東京都豊島区駒込1-10-13-907
TEL03-5976-8160

雨に濡れた緑の中を緩やかなカーブを通り抜けると広いガラスのエントランスにたどり着く。左手の大きな岩の割ったり削ったりしたその端から水が流れ落ちている。この岩のような石は一見自然のまま置かれているように見える。この建物の足下に立ちはだかり、何かから守っているかの様な「水龍」と名づけられた巨岩の創造物。

エントランスのガラスの前に立つと雨露にかすむガラスを透して中庭の向こうに黒と白のストライプがみえる。

早く見てみたい衝動に駆られる。雨の中から、一足中にはいると、そこは静かな空間を保ち左の受付に赤のタブローが口紅を引いたように印象で目に入る。上層階にはマルタバンの彫刻があり、限られた壷庭のような空間にくっきりとした白の形を浮かび上がらせていた。1階の池の廻りを室内から眺めていると水面にあたる雨脚が水に穴を開けているような小さな点の平面となって映っていた。晴れた日には青い空と白い雲が映し出され、四季折々の季節を描き出すキャンバスのように見えるのかもしれない回廊を巡りながら池の様を観察していると黒と白の縞の廊下にぶつかり興味深い風景を見せた。正面の入り口から広い池を通して見えるこの壁は天気の良い日には黒と白のストライプが水面にゆらぎ、面白い独特の情景を見せてくれるに相違ない。黒白のストライプにはステンレスのエレメントが差し込まれて周りを写し込み、人が移動すると共に見え方に変化が生じ、水の自然と作意的なストライプの意外性とが感じられ、楽しめる回廊になっている。池を囲むもう一辺は廊下というには広く池に面したテラスともいえる空間になっていてパーティー等のホールとして使用可能に広くなっている。ここでも壁に、表現がなされ、シンプルに切り抜かれた模様が2重壁になっており、その間にある光の効果がさらに北欧的な幻想性を見せている。この建築全体のアートの印象は、洗練されたしつけの良いものが取り込まれて、訪れる人には心地よい気分を十分に感じられるだろう。

一方、竹中工務店技術研究所は、この千葉ニュータウンの地形を生かし、そのまま大地の丘陵に沿った建築が建てられている。門に立つと小高い丘の向こうに少しその入り口の一部分が見え隠れしている。入り口に近づくまでの勾配は丘を登っていくような感があり大地と建物が重なっているかのよう。内部は外部と対照的に白の抽象的、幾何学的象形文字的な形が構成、配列、連結され、それに光と影、切り抜かれた隙間から見える自然の要素が2重奏、3重奏を奏でている。この研究所ではアートと称するものは蛇門石の2つのオブジェだけである。白の織りなす様々な空間が季節の変化を時として織り込み言葉や音となって人々に働きかけるのかもしれない。私は白の持つ自由と、緊張と少しの恐怖を感じ、この施設の可能性を見た思いがした。アートは本来完結したものでなく途上にあるものだと考えればそれぞれに自由に見ることが楽しめるはずではないでしょうか。2つの建築のアート鑑賞は対称的なものとして感慨深いものでした。

aaca会員
金属造形作家
HITOSHI FUJITA
藤田 仁
埼玉県朝霞市溝沼7-14-15
TEL048-466-3578

久し振りにAACAの事業に参加させて頂きました。私は、東京に生まれて育ち、生活の拠点としながら今回の見学地、千葉ニュータウン地区に初めて訪れました。

都県境の江戸川を渡ると車窓は、穏やかな丘陵が脈々と続く大地、民家の少ない地域がひろがり、いまだに東京近郊に広大な土地がある事を知り驚くとともに、自然の残る環境のままに都市計画が進んでいる様子を眺めながら現地・千葉ニュータウン駅に着きました。

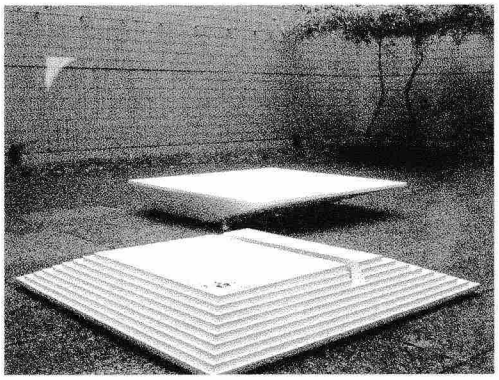
最初に見学する三井海上ビルディングは、駅より眺めると蒲鉾形状の屋根を持つ約20階建て、落ち着いた赤紫系の煉瓦をまとった建築に見えましたが、近くに寄るにつれてスペースを良く活かし自然を大いに取り入れた設計思想の建築と変化しました。豊かな大地に芝、木々を配置し、そのなかに大きな池があり、平らな水面上に建築されたビルディング本体と敷地は、各所に円弧を多く取り入れた構成で設計されていました。特にビルに働く人々と周辺住民が、人工の水辺を介して融和できる空間は、都心のビジネスビルにない大変楽しい環境を感じました。内部は、アート作品、造型物を数多く配置してあり、上層階の庭園空間は、時間と場所を忘れさせる環境でした。

次に見学させて頂きました竹中技術研究所は、三井海上に隣接して全体の外観は、丘陵地帯を活かした土地に水面と緑芝が萌えて、白色一色のシンプルな中に穏やかな美しい表情をした低層の建物でした。非常に簡素化され、白色面とガラス面を、直線と直角、平行の線、角度は1：9の勾配比で構成してあり、すべての部屋と空間に太陽の光が入る設計に現代芸術美を感じました。曲線は、上空より見る事ができ各施設を配置する構成上に正円が使われていて、宇宙人にはシンボリックなランドマークに見える事と思います。

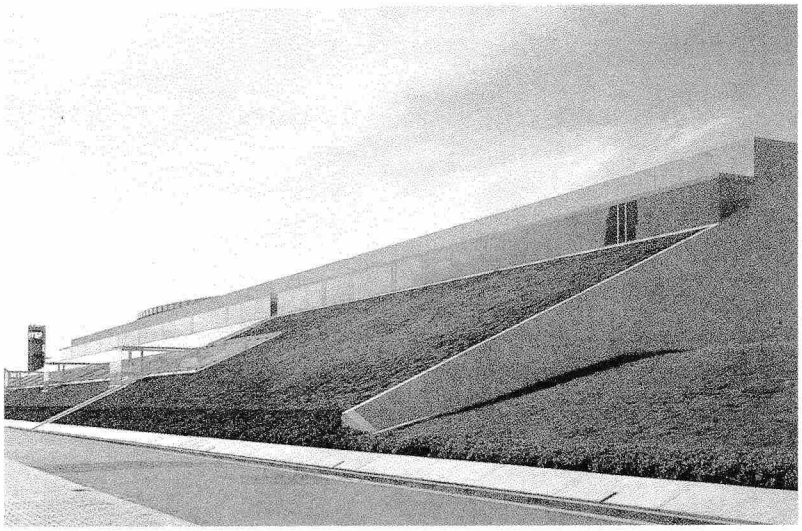
この施設のように建築用途が許すならば、水平に見れば小高い丘に見え、上から見れば建築の顔が見え、周辺に対して自然に近い低層建築は、高層ビル街の中に一つは欲しいと感じました。

今回の見学で感じた事は、小学校にあった大きな銀杏の木、中学校にも正門からの並木と泰山木があり、仕事をするビルディングにも、導入部には土の香りとシンボル的な木樹そして小鳥、流れる水辺の環境などを人工的であっても条件が許す限りたくさん欲しいと思いました。人間と自然と建築の共存環境のために…

竹中技術研究所　正面入口



三井海上本社ビル　屋上庭園



竹中技術研究所　外環

竹中技術研究所内

·aaca会員
株式会社メックデザインインタナショナル
HARUYASU IWASAKI
岩崎 治保
東京都港区六本木3-16-33 青葉六本木ビル
TEL03-5573-2511

約2年程前に、この千葉ニュータウンへは、ある施設のアートワークの仕事で何度か来た事がある。私が通勤に使っている沿線に都心に近くこれ程の、広く手付かずの自然を残し、緑あふれる風景が見られる所は多くない。此の風景の中に幾つかの企業の建物があり、今回見学させて頂いた三井海上本社ビルと竹中工務店研究所が道路を隔て建っている。

三井海上ビルの外観は、なだらかな緑のうねりの植栽の中に黒色系のタイルで構成されたマッスの執務空間と、スキンと感じられる硝子箱のコアスペースが組み合わされ素材による対比が心地良い緊張感を表している。エントランスへ通じるアプローチは美術館、又は庭園の散策路の様な印象を受け、素材の選定にこだわりを持った特殊硝子で構成された風除室を抜けホールに入ると、眼に入るのは左右一杯の広がりを持った水面である。「水面が今回のテーマの一つ」と説明を伺った。水面は浅く、広さが充分あり、単に広さだけでなく、上下二段になった水面のレベルの違いが見る位置により、受けとる側の印象を変え、制御された視界の効果により、一層深く印象づけられる。そして、各所で扱われる視界を制御された開口部は、空間のボリューム、横への広がり、内部、外部空間の環境の対比、外部からの明り、等を調整し、見せたい物、表現したい物をより効果的に見せていると感じられた。

各施設の部屋を水辺を巡る様に進んで行くと、幾つかの内庭と、片山利弘氏の壁面アートワーク、その他の計画された絵画や、彫刻の空間演出に出会い、質的に和風空間の情緒的展開をイメージさせ、各々の表現が柔らかで美しい。

建物の内部からはどの位置でも見えた広い水面は外に出ると姿を消し存在を知る事は出来ない。

道路を隔てた竹中工務店研究所は、私自身ある時期ランドスケープに興味を持っていた事もあり、緑の芝の地表に埋もれた様な直線で構成された建物は、周囲の自然とは対照的に人工的な美しさを表現しており、前からチャンスがあれば見たい建物の一つであった。

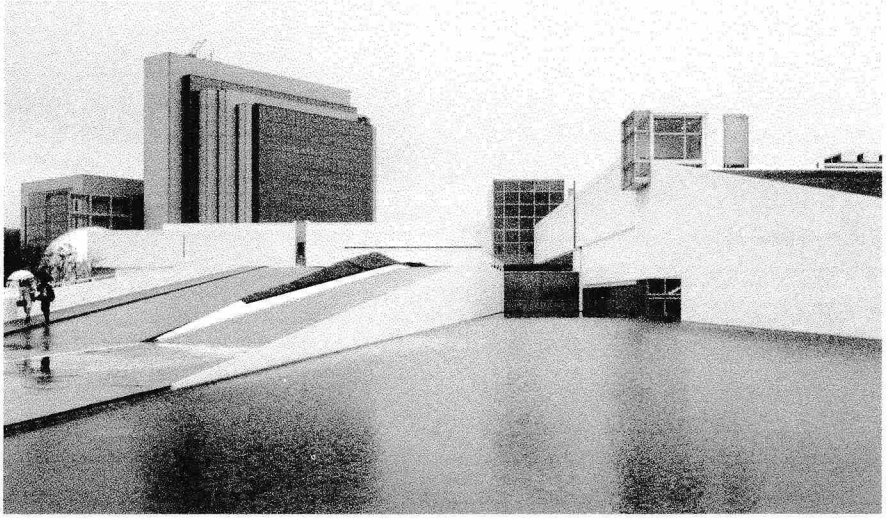
建物を構成している白い外壁は横長の板状で細いスリットと開口が設けられ、格子に組まれた硝子の居室とのバランスは平滑な水を湛えた池に軽やかで鋭い表情を映している。

第5の展開図と呼ばれた美しい鳥瞰のプランが示す様に施設は幾何学的に構成され、秩序を持ち、建物の性格を表現することへの強い意志の現われが感じられた。

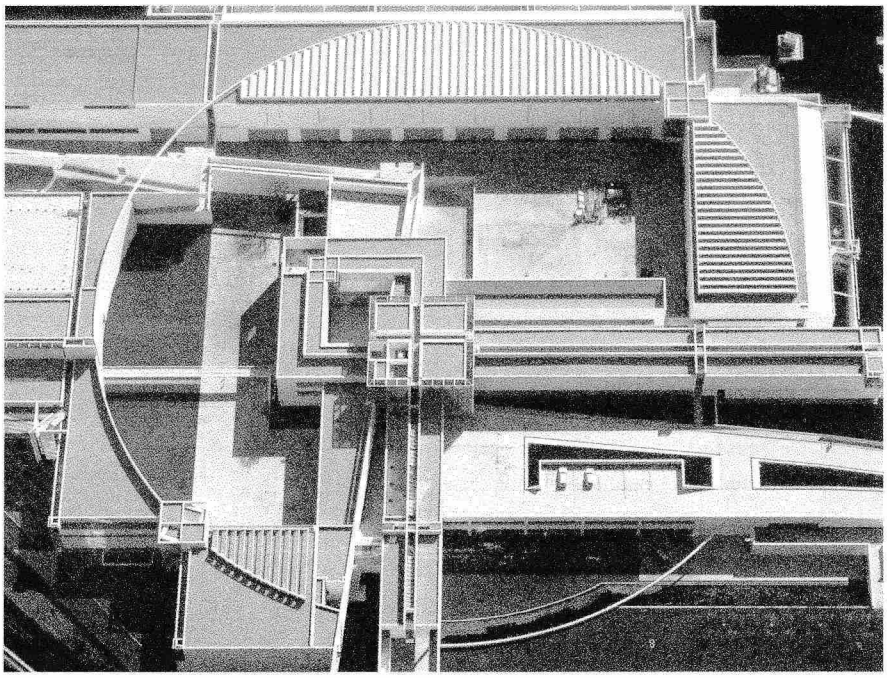
内部空間は、流れのスリット窓と分節のトップライトが設けられ軸線を振る事により生みだされる変形の効果的空間との調和で、開放感に溢れ、建物の外部表情にも繋がり、軽やかで知性的な表情を見る人に与える。

インテリアデザイナーとしてのスタンスで、二つの優れた建物を見学し、各々の異なった思考による精神的、知性的な空間表現の豊かさを充分堪能出来た。

四月とはいえ、冷たい雨の厳しい天候の中、ご案内頂いた目建設計　石原主幹、竹中工務店　赤坂課長、他のご担当の方への感謝と、此の見学会をご計画頂いたaacaのご担当の皆様にあわせてお礼を申し上げます。



竹中技術研究所　正面



竹中技術研究所 鳥瞰

人形工芸家
HARUO NOGUCHI
野口 晴朗
千葉県若葉区大宮町1303-13
TEL043-265-7172

人形と母子像

人形と彫刻との違いをしばし問われることがある、学校は彫刻科の出身である私にとって、それは、人形と取り組むようになった当初から創作以前に必要な、定義づけておかなければならぬことであった。

人形は文字通り「ひとがた」だが、彫刻は純粋な立体美術でありオブジェへの指向も当然だし、主題は必ずしも人体に限られるものではない。人形は「ひとがた」を否定して存在し得ないが、その意味するものは何なのか…古代の副葬品としての土偶やそれらの持つ呪術的な要素、藁人形に五寸釘というのもある。つまりは、人間にひそむ極めてプリミティーブな情念が「ひとがた」を必要とするものなのである。

これは、農耕文化の土俗性から昇華した能の世界と共通している。従って、能面に凝縮された象徴的な美しさは、そのまま様式や技法にわたって御所人形にも関連している。終戦後の混乱のなかで、小さな能面のひろげる幽玄さと、緻密で完成された品格に、小さな人形造形としての可能性を教えられもしたのである。

外務省の支援によって現代工芸の海外巡回展が催された頃から、生活空間や環境の激変によって工芸全般に新しい適応性が求められるようにもなったのである。それは、クラフトと云う領域を越え、工芸に造形としての比重が一層加わることでもあった。

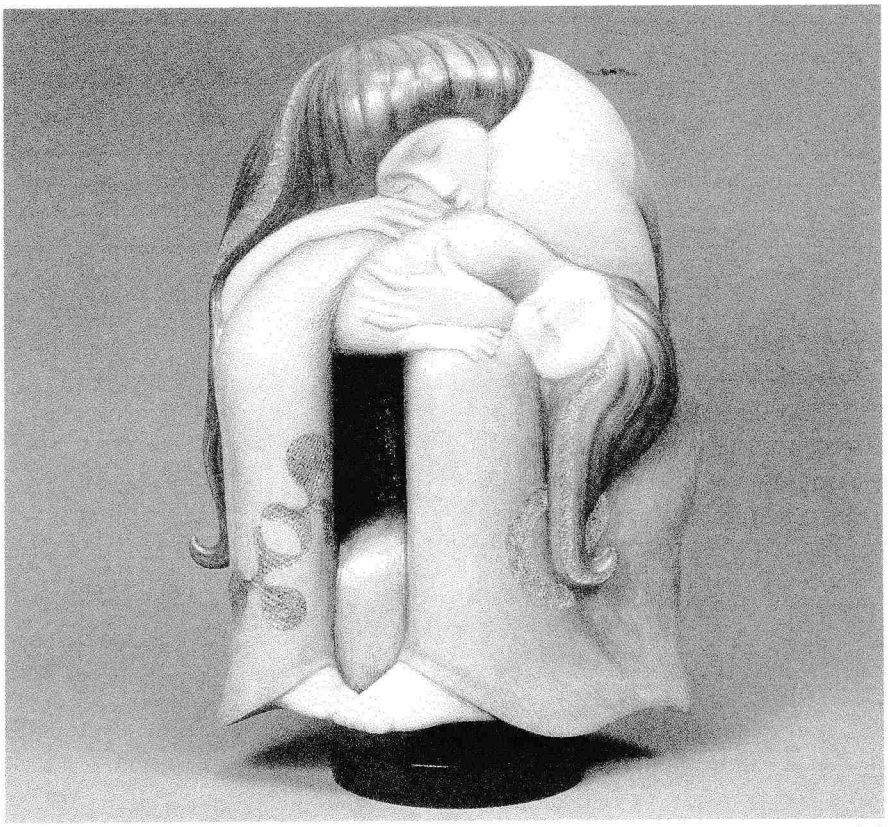
素材的に脆弱な人形と、温度や湿度に弱い古典的な技法からも脱皮すべき時期でもあった。私もポリエステル樹脂なども研究し利用もしてみたのだが有害なガスのことや、求める品格ある美しさには遠いものでもあった。私が現在進めている技法が完璧である筈はないが、能面によって教えられた胡粉の持つ美しさを損なわぬ方向で従来のものより遥かに強靭な材質には変えて来ている。

更に、人形の特質ともいえる「情念」の世界を理性を越えた「愛」であることに私は極限している。キリスト教は母子像によって「人間愛」の説明を極めて分かり易い形に置き換えているが、私の作品に母子像が多いのは私自身の情念の美学でもある。

作品のなかで私は母親になることはない、常に母親に縋る子供なのである。迷いや憂いも多く、ただただ甘えて救いを求めているのである。

機能化され無機的になってゆく社会は世紀末的な現象とも重なってしまう、素朴な「愛」人間性への回帰が、私の人形作りのエネルギーになっている。

森の声紋 430㎜(H)



短い夢 520㎜(H)

彫刻家
日本芸術院会員
KENTARO HASHIMOTO
橋本　堅太郎
東京都杉並区今川1-1-3
TEL03-3390-2437

木彫雑感“木と人の出あい”

木彫家の家に生まれ、幼い時からノミと木ッ葉（こっぱ）の中で育ち、木の切れはしを積み木がわりに重ねて遊んでいた。小学生高学年の頃、夏休みの終わり近くなると、父から木の板をわけてもらい、レリーフのまねごとなどして工作の宿題としたが、彫るということはそれ程好きではなかった。唯、木にはいろんな匂いがあるなと子供心に思っていた。

父は日展に出品していたが、どちらかというと動物作家として名が通り、鹿を得意としていた。動物園や修学旅行の奈良で見た鹿は、父の彫った鹿とは異なり、何か弱々しくシャープではなかったのを不思議に覚えている。

旧制中学四年の頃父に呼ばれ、長男だから後を継げといわれ困惑した。当時、戦後の混乱した大変な時代で、彫刻家の生活は決して楽ではなかった。彫刻でメシを喰うのはマッピラと思って断ってしまった。

断ってから三ヶ月ばかり、アトリエで夜遅く迄、ノミの尻を叩く父の後ろ姿が何故か妙に気になって仕方がなかった。一ヶ月、二ヶ月、とノミを叩く背中が私にささやき始め、そのささやきは段々と強くなるのだ。

美術学校出身ではなく、徒弟教育からのし上がってきた父の生い立ちと、その壮烈なる生きざまを振り返り乍ら、心は嫌という方向に向かい乍らもゆれ動き、そしてささやきに負け芸大受験となった。楠の木の香りがアトリエ一杯にこもっていた夜だった。父の嬉しそうな顔が印象的だった。

立身出世をする為に彫刻家の道を選んだのでは無いにせよ、自分が果たせなかった夢を子に託す親の子供への願い、子供にかぶせる理想、それは親のあこがれといってもよい。

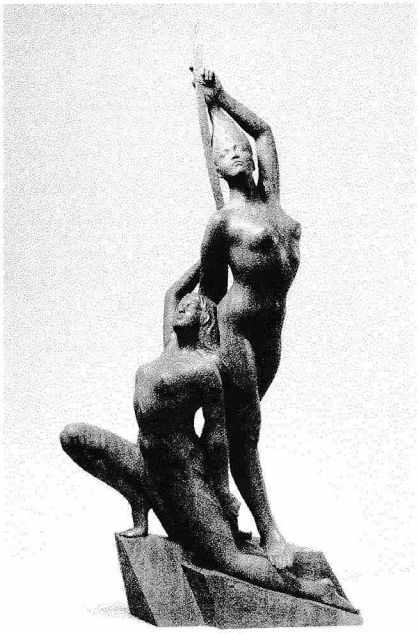
しかも大変困ったことには、親の願望には自分が果たせなかった「人生の目的」が含まれていることが多いようだ。それが子供にとっては大きな負担になってかぶさっていくことになる。私の父が当時、どんな考えで私達兄弟三人に話したかは定かでないが、このスタートが芸大の四年間、そしてその後の何年間か、私を苦しませたことは事実だった。

教育は人を“幸せにする”手段と一般に考えられているが、親の云うままにこの道を選び苦しんだことが、私の中にその人らしさを全うする為に教育があるという教育観を培いはじめた。その人らしさとは、かけがえのない自分のことであり、その人らしく生きる人は“幸せ”なのだと子供に気づかせ、「君らしく」生きるのだと教え育てるのは親のつとめなのではないかと思う。自分の子には、世間体など考えず好きな道を選ばせ、親馬鹿かも知れぬが成功しつつあるようだ。

木には固有の厚みと弾力があり、そこから生まれる親しみがある。その上、木には匂いがあり、ぬくもりがあり、年令があり、生命のいとなみがあり、凡そ人間の体質により近い。

この恵まれた材質から、現代に通ずる様式を生み出すのが私の使命だと思っている。

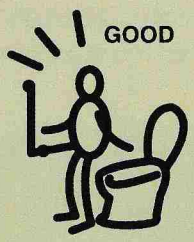
父の故郷、安達太良山の麓の樹林を歩き、さまざまな木の声を聞きながら、新たな“いのち”を彫りたいものと願っている。



竹園生

発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax　03-3457-1598
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20
建築会館6F
振替：東京 1-365085
編集：(社)日本建築美術工芸協会　広報委員会
広報担当理事　柳澤孝彦
委　員　長　玉見　満
副 委 員 長　高部多恵子
冨田俊男、北村孝昭、石田眞人
渡部毅志、高塚信吾
制作協力：㈱SP建材エージェンシー

バリアフリー手すりは、機能性豊であることが大切と考えます。



補助手すり「愛の手オーバル」

AinoteOVAL

NEW

福祉社会に貢献する
ナカ工業
NAKA CORPORATION

お問合わせは――――――― 営業推進部
03-5211-0731
〒102-0083 東京都千代田区麹町3-4(トラスティ麹町ビル2F)

サービスネットワーク
札　幌☎011-662-7611 東　北☎022-296-1311 北関東☎048-648-0871
東　京☎03-5211-0711 横　浜☎045-682-5141 名古屋☎052-933-1288
大　阪☎ 06-886-8966 広　島☎082-246-9200 福　岡☎092-272-3511

CADデータがダウンロードできるホームページ公開中!!
ご質問、ご要望、お見積依頼などもEメールにて受け付け中です

URL http://www.naka-kogyo.co.jp